可能性があるが、又地質の相異による傳播速度の違いの多い處から異常震域の説明方法を暗示する様な點も考へる事が出来る。

とにかく此の小論から判る處は上に述べた SeS の觀測から深發地震の深さを求めることも出来る事及び地殻内部で地震波は Gutenberg の與へたよりも少し小さい速度で傳播するのではあるまいかと云ふ事である。

この小論では和達先生方の論文が無ければ計算が少しも出来なかつた譯で、末尾乍ら厚く御禮を申し上げ又絲永所長の御助言に對しても深く感謝する次第であります。

要 報 Notes

北海道日高沿岸の地震調査

野村新太郎

On Earthquakes of the Coast of Hidaka, Hokkaidô.

By S. NOMURA.

1. 緒論 北海道日高沿岸は本邦に於ける地震頻發地域の一であるが、特に近年は其の活動が盛んで、其の中にて 1931 年 2 月 17 日浦河附近及び 1932 年 11 月 26 日新冠川河口の兩者は多少の被害をさへ與へて居る。之等の地震に對しては和達博士及び浦河所長に依り若干の調査あるの

みである。本報文は之等地震を調査したもので、浦河の北田氏、札幌の下川氏、帯廣の小林氏等に負ふ所頗る多い。此處に深謝の意を表する。

調査された地震は 1931 年及び 1932 年の浦河に於いて有感覺なりしものの中室蘭、札幌、帯廣に於いて觀測が充分行ひ得たもののみを北海道

第一表 8 個の北海道南岸の地震に就いて (P-S) の觀測を基とせる調査結果

	1	2	3	4	5	6	7	8
發震時	1931, II 17th 4 ^h 24 ^m	1932, XI 26th 17 ^h 47 ^m	1932, XI 27th 3 ^h 49 ^m	1932, XI 27th 4 ^h 31 ^m	1932, XI 28th 4 ^h 09 ^m	1932, XI 30th 7 ^h 08 ^m	1932, XII 3rd 4 ^h 08 ^m	1932, III 8th 17 ^h 51 ^m
(震源) 浦河 室蘭 帶廣 札幌	27 ^s 18.3 11.4 19.9	7.5 ^s 14.7 14.5 16.0	7.5 ^s 14.4 14.5 14.6	8.3 ^s 14.4 14.5 15.8	8.3 ^s 13.6 16.0 16.1	8.0 ^s 14.7 14.5 12.9	8.0 ^s 13.7 14.5 15.0	7.2 ^s 19.3 11.0 18.3
X Y Z X(mean)	26 ^{km} 24 22 6.95	42 ^{km} 1 43 8.11	50 ^{km} 15 41 8.05	42 ^{km} 0 63 8.91	52 ^{km} -17 52 8.44	48 ^{km} 12 40 8.11	50 ^{km} 4 42 8.19	1 ^{km} 22 57 8.43
記事	浦河地震 の餘震	新冠地震 の餘震	同左	同左	同左	同左	同左	

氣象月報より擇んだ。總數は 25 回である。

2. 震央及震源の深さの決定

震央の決定は初期微動の比を用ゐる方法、時に此の方法の用ゐ難い場合は適當な工夫に依つた。觀測所は浦河、室蘭、札幌、帯廣の四ヶ所であるから、震央位置及び震源の深さを求める事は可能であるが觀測誤差を考へると充分ではない。割合によく求め得られたと思はれる場合は地震總數 25 回中第一表の 8 個である。震央位置は X, Y な

る座標にて示めし、震源の深さを H にて示めす。座標軸は原點を浦河に取り x 軸の正方向を室蘭を通過する方向、 y 軸は之と直角に正方向を北側に取つた。8 個の地震に就いては第一表に示めす如き結果が求められた。

第一表にて見られる如く、 K の値は其の平均として凡そ 8.1 程度が此の地域に於いては適當らしい。故に残餘の地震に就いては K の値 8.1 を假定して震央位置及び震源の深さを定めた。

第一圖 北海道日高沿岸の地震の震央分布と其の震源の深さ

第二圖 震源位置の投影圖

3. 震源位置の分布状態

震央位置の分布は第一圖に示めすが如くである。圖中の震央位置の傍には震源の深さを數字を以つて示めして置く。震源の深さは浦河地震系統のものにては20~40 軒、又新冠川地震系統のものにては30~60 軒となり其の深さが稍異なる。尙内陸地方には別系統のものとしてずつと深い震源を有するものが二三ある。

震源位置の分布は、日高沿岸に沿ふ地表面に垂直な平面に投影して見ると、其處に若干の規則が見られる様である。第二圖は其れを

示めすもので日高沿岸に沿ひ浦河より離れるに従つて震源が浅くなる様な傾向が見える。北田氏が2月17日及び11月26日の兩地震を調査された所によれば、斷層線が日高沿岸に對して直角の方向に走り且其の位置は第2圖の曲線の下端附近にある様になつて居る。

4. 北海道浦河附近の震波傳播の係數

以上の調査に於いて、 K の値を見るに深さと

共に増加して居ることが看取出来る。従つて震央に於いて觀測される $(P-S)$ の値が色々の深さの震源に對して求め得られる。此の値を國富氏が氣象集誌 昭和八年一月に求められた結果と比較すると殆んど同一の値を示めることが分かる。即ち北海道に於いても震波傳播の有様は別に著しい變化がないことが云はれる。第二表に其等を示す。

第 二 表

深さ(軒)	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
K	5.6	6.65	6.9	7.5	8.0	8.4	8.8	9.1	9.4	9.7	9.9
τ (秒)	0	1.5	2.8	4.0	5.0	6.0	6.9	7.8	8.7	9.4	10.1
國富氏による τ	0	1.5	2.7	3.8	4.9	5.8	6.7	7.5	8.5	9.3	10.2

北海道のこの地域に起る地震は大體に於いて震源の深さが40軒位であるから、通常は K の値として8.0位を用ゐて居ればよいと云ふことになる。

(終)

(附記) 以上は野村氏の調査の概要を抄録したものである。(和達)

潮岬及筑波山の北東風と東京の降雨との關係について

村 瀬 宗 夫

On the Dependency of Rainfall in Tôkyô on the
NE Wind at Siomisaki and Tukuba.

By M. MURASE.

潮岬で北東風が吹くとその後東京で雨になり易いといふ事は⁽¹⁾大地氏の調査で明かである。

即ち大正二年以降三ヶ年の統計で潮岬で午前六時に北東風が吹きその日の午後六時以後の二十四時間内に東京で雨の降つた回数と潮岬で午前六時に北東風が吹いた回数の比は0.65である。又同様に筑波山の風向が東京の天氣の指針として有力であると云はれて居る。そこで午後六時の潮岬、筑波の北東風と翌日二十四時間内の東京

の雨との關係を大正十二年以降昭和七年迄の十ヶ年の材料につき調べた。

今東京で雨のあつた日数を N_r 、全日数を N 、 $\frac{N_r}{N} = n$ 、 $N - N_r = N_f$ とすると

$$n = 0.4744, \quad N_r = 1173$$

潮岬で北東風が吹き東京で翌日雨があつた回数を N_{sr} 、雨がなかつた回数を N_{sf} とし

$$x = \frac{N_{sr}}{N_{sr} + N_{sf}}$$

(1) 氣象集誌 第三十六年、三十六頁。